

しずおか平和の風

No21
2017年1月25日
発行
静岡市
平和委員会
静岡市葵区鷹匠
1-5-8
TEL 253-1854
FAX 252-0785
メール
Peace-City
@mail.707.to

-頌春- 年頭にあたって

静岡市平和委員会 会長 木野忠

2017年は、核兵器禁止条約を実現させるまでといふチャンスの年となるでしょう。昨年(第71回国連総会)は、「核兵器禁止条約の交渉」を今年の3月から開始するよう(国連加盟国の113ヶ

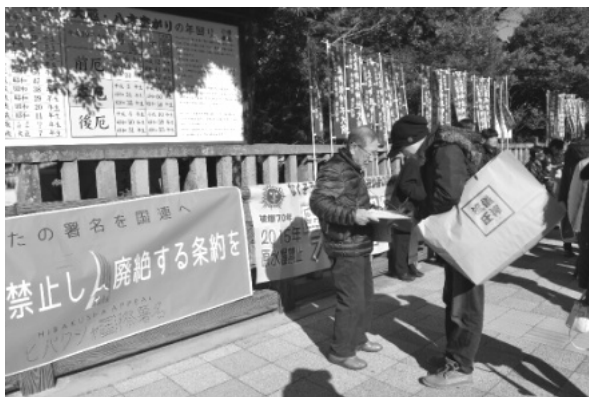
国に及び圧倒的多数の

国々によって決議されました。ところが唯一の被爆国である日本政府がこの決議に反対し、世界の国々を失望させました。勿論こうした日本政府の姿勢に、広島・長崎の被爆者をはじめ多くの国民の中から怒りの声

があがっています。こうした情勢を受け止めて、静岡市原水協は毎年の恒例となつて被爆者支援・連帯元日行動で募金活動だけでなく、核兵器廃絶を願う「ヒバクシヤ国際署名」も同時に取

組みました。日本被団協代表委員の谷口稜暉さんは年頭所感で「いよいよ今年に国連で核兵器禁止条約に向けた具体的な議論が始まります。核兵器のない世界の実現のため、皆さんと共にヒバクシヤ国際署名で頑張りぬく決意です。」と表明しています。

元旦、当日は天候に恵まれ7団体、15名(内平和委員会会員11名)の皆さんが参加してくださり、浅間神社の入り口の赤鳥居下付近で募金・署名を大きな声で、初詣にこられた市民のみなさんに訴え募金13584円、ヒバクシヤ署名40筆が寄せられる大きな



→元日行動 浅間神社入口

成果がありました。

「しずおか平和の風」が発行される頃は、アメリカの大統領はトランプ氏が就任しています。これを「日本の対米自立のチャンス」と前向きにとらえるかは別にして、現内閣の安倍首相ではどうせ多くは望みません。私たちは、当面の安保法制廃止・平和憲法守れなど身近で起こっている、「戦争法を許さない共同行動」、「9条守れ総がかり行動」、「東富士オスプレイ飛来抗議・監視活動」、「沖

縄と連帯する諸活動」、「浜岡原発再稼働を許さない活動」等々。

「平和運動の三つの自殺行為」として挙げられている、①誰かが、どこかで、何とかするだろう。②いざれ上から、解説と指示がありすぎるだろう。③こんなささいな事をしたつて、たいした効果は無いだろう。と自らを戒める合言葉を活かし、平和・反核運動に取組もうではありませんか。

平和をめざす行動

- 1月28日 13:30 県評会館 静岡市平和委員会総会
- 1月29日 13:30 労政会館 非核の政府を求める静岡の会総会記念講演
- 2月4日 13:30 静岡音楽館AOI 浜矩子講演会
主催：浜矩子講演会実行委員会
- 2月19日 18:30 青葉公園 主催：戦争法廃止オール静岡アクション
- 2月22日 12:00 109ビル前 浜岡原発再稼働反対宣伝署名行動
主催：浜岡署名推進静岡会議

初日の出

つむじ風

元旦の朝5時、車で日本平山頂へ向かった。私が勤務している静岡健康友の会の機関紙の巻頭に使う「初日の出」の写真を撮るためである。到着すると既に駐車場は満杯であった。

付近の土産店の広場に車を停め休憩。徐々に白んできた中、展望台へ向かったが入れず、仕方なく清水に下る道路を歩き、伊豆半島の上から昇る初日を待った。快晴で富士山や清水港の景観が、明るくなってくると広がってきた。午前7時3分伊豆の山から初日が顔を出した。周りの群衆といっしょに数枚をカメラに収めた。

“誰もが平和を望んでいるのだ”

この平和を思う市民の想いとは反対に日本政府は「戦争する国」に変えようとしている。清水港にもイージス艦などが入港してくる。絶対にそうはさせない。今年は政治を変える新しい動きが広がっている。朝日に照らされた平和の象徴富士を見ながら新鮮な気分を味わった元旦のひとつときでした。

実際に使われた写真は、高松海岸でもう一人が写した写真が採用された。 丹羽 巖(音羽町在住)

新しい年を迎えて思うこと

— 黒田 久子 —

自己体験を語るには、どれだけの想いがあつただろうかと考える時、歴史を後世に伝える為「慰安婦」の碑など日本にこそ必要と思う。沖繩の基地建設、オスプレイ給油飛行など直ちにやめてほしい。

今年も又、暴走政治は一日も早く終わらせたいという思いはますます強くなりそうだ。毎年行われている浅間神社前の元日行動に、あきらめず持続的に行われている行動にいつも感動！

「平和は祈る事ではなくつくっていくもの」今年もこれを貫きたい。



昨秋、現職の大統領として初めて、米国のオバマ氏が広島を訪問し、被爆者の代表とも固い握手をかわした。世論の力に押されたのだと思った。年末には安倍首相が真珠湾を訪問し「和解」を演出、日米同盟を強調した。

しかし「不戦の誓い」を言つながら、侵略戦争を反省し「慰安婦」問題解決等にも真摯に向き合つてほしい。お金を出したからといって、「少女の像」の撤去を求めるなど考えられない。「日韓合意」で「解決済み」を繰り返している安倍政権。被害を受けた女性達が、

「静岡市の女性の戦中戦後の暮らし」を読んで

目と心を曇らせないように生きなみきや
水戸 秀子

十一歳も年上の方の戦争や平和について感想を記すことや、生き方について述べることは大変おこがましい気がします。ただ、学童として戦中から、その後の戦後を生きてきたので、その体験から自分の意志を強固に持ち、教育に対する考え方もしっかりと我がものにしていくことに感激しました。

国民学校のとき毎日のように出征兵士を見送り、戦死した「聖霊」をお迎えして、お寺に行き、勉強するときはなかつたと書いてあり、戦争で大切な命が亡くなり、子どもの頃はいつ殺されるかといつもびくびくしていた。

B29がうなりをあげて飛び去る様は、子ども心にどんなに恐ろしかったことでしょうか。山本さんは学校では宿題を忘れると並ばされて、左右から往復ビンタをくれた男先生の当時のごとで、「殴られた子どもは宿題を忘れたのではなく、わからなかつたのではないかと」思っただよです。帳面もない、鉛筆もない時代に子ども達が工夫をして勉強に励む様子とその教育すら奪ってしまうのが戦争の現実なのだと思いました。

結婚のこと、式のこと、結婚前に夫になる相手と話もしたことがなく不安だったなどをわかりやすく書いていますが、結婚について今は、日本国憲法24条で「個人の尊厳と両性の平等」を謳っています。憲法施行後4年たっても顔もみたくもない話をしたこともない人と結婚するということがびっくりしました。このようなのは、当時はまだまだどこにもあつたことなのでしょう。

私の戦争の記憶は、父の戦死と防空壕に逃げたこと、焼夷弾が橋の上のバスに落とされて燃え盛るのを見た程度で、頑なに幼児期の「ママですが・・・」戦後、「憲法のはなし」を読んでいた方かなと思えますが、終戦前に義務教育8年を終えているので、戦後、生活の中でのずっと民主主義や人権、平和について学んでいたことと拝察します。長男の高校進学について将来を見つめての考えや期待があつて、それを最後まで主張できなかつたことで悔いを残して

いるのはとても残念に思います。その後、山本さんは長男が何度となく海外旅行に連れ出してきています。世の中が落ち着いてきて、家庭内が平和であるからできることだと思います。世界の中の日本を自分の目で確かめ、しっかりと見詰め、先人のすごさも、また戦争の愚かさもご自分の目で確かめてきた思いがあるのではないのでしょうか。

戦争は大切な人を亡くします。また、幼い子どもの生活を破壊し、心にも深い傷跡を残します。戦争をゲームのように考える向きもあるようだが、「日本国憲法」の上に日米安保条約があるような沖繩をはじめとした実態が、目や心を曇らせることがないように、山本さんの生き方に学ぶべきことをしっかりと学び、「戦争のない世界」を子供たちに繋ぎたいと思います。

み取れる。戦争は直接関わる人のみならず全ての人々とわりわけ未来ある子どもへの運命を変える。勉強の代わりに兵士の見送りや爆弾に怯え、「いつ殺されるか」とびくびくしていた」との表現には胸が詰まる思いがする。彼女は兵士に旗を振りつつ、子どもながらおぼろげに戦争の不条理を感じていた。その思いは成長後確固たるものになり、強い意思となつていったことがわかる。私の母は彼女ほど聡明でなく、深い思慮はなかつたように思う。だから断片的な話しかしなかつたのだろう。

私は志げさんよりたつた二十年後に生まれただけなのに、学びたいだけ学び、すべての選択が自由にできる人生を歩いてきた。「戦争」によつてこれほど違いがあるのかと今さらながら感じる。彼女たちは不運な時代に生まれたと短絡的に考えるのではなく、なぜ戦争に至つたか、なぜ戦後十年以内に生まれたか、自由な人生が選べたかを突き詰めるべきだろう。新憲法だの新法律のおかげというふうな理屈ではなく、その思想が辺鄙な田舎にどのように行き渡つたかを知りたいと思う。

後半は、結婚後の事が書かれ、正直明治時代の話かと思われた。憲法の「婚姻は両性の合意のみによる」はどこにいったのか？特に驚いたのは、母親から「この家は兄弟夫婦の家だからもらい手が来たら出ていけよ」と言われたところ。私の母は彼女より十年早く結婚しているが、そんなふうではなかつたようだし、

犠牲者の人生を想像する
山本 千秋

「あんたはイモ汁で育つたんだよ」
小澤 信和子

「戦争のばかばかりい事。戦争は貧しくなるだけ。偉い人は何を考えていたのでしょうか。この記述、ほんとに率直な思い、誰が普通に考えても当然のことと感ずります。今、86歳にして、当時の事が鮮明に覚えている。これだけのことが語れることは凄い大事なこと。」

今、語り部がだんだん少なくなる中、お話を聞く機会もあるといいなと思います。ポケモンに夢中になつてくる若者のこと、戦争をゲームのように考えている若者のことなど、今の世相もとても心配しているように思います。このことは今、私たちが平和への思いで進めている運動に繋がる大切なことです。私は戦争の終わった翌日生まれていたので、戦争の実際は何も知らない世代。母親たちが、山本さんと同じような苦労をしてきたのだらうなと思います。よく「あんたはイモ汁で育つたんだよ」と聞かされていましたが、戦争での体験といつのはあまり聞いてこなかつたなと思ひ、もっと聞きだしておけば良かったんだなと後悔します。郷里は旧の安倍郡大河内村なので同じような境遇だったんだらうなと思ひ読みました。

叔母たちも同様だ。家や地域により異なる考え方だったのかとも思う。詳細には書かれていないが、見知らぬ家に嫁いでからのご苦労は想像がつく。しかし、結婚式当日の様子や詳細に描かれ非常に興味深いし、志げさん自身が特別なこととして記憶してあらわれるのだから、長く連れ添われているご主人を唯一の人と思われているのではないかと推測する。私の長姉は昭和四十年前後に結婚したが、やはり家で式を執り行ったことをついで思い出した。

奇しくも今日(12月28日)は、安倍首相が真珠湾を訪れ、退役軍人らとも言葉を交わした。五月にオバマ大統領は広島で被爆者と会つた。その一つ一つは貴重だが、それら直接の被害者の後ろにいる数えきれぬ犠牲者の人生を私たちは想像し、記憶しなければならぬだろう。志げさん、そして巻き込まれたすべての国の人たちが、戦争がなかつたら、自分の意志に沿つて生きられたかもしれない。世界中で今起きている数多の戦争においても同様である。

